

# 毒酒

野村胡堂

## 一

「親分、今日は、良い陽気ですぜ。家の中に引っ込んで、煙草の煙の曲芸をやっているのは勿体ないじゃありませんか」

ガラツ八の八五郎は、入って来るなり、敷居際に突っ立って、こんな事を言うのです。

「大きなお世話だよ、どうせお前のように、空っ尻からけつのくせに、花見に出かけるほどの胆力はないからだよ。——陽気が良いから、日向に引っくり返っていても、トロリと酔い心地になるぜ」

銭形の平次は、こう言った無精者でした。尤も縁側に寝そべって、街の遠音を夢心地に聴きながら、白雲の行きかきを、庇ひさしのあいだから眺めているのも満ざら悪くない陽気です。

「天道様に照らされて、ポーッと酔よい心地こちになるなんざ智恵がなさ過ぎますね。今日のような日には、どこへ行っても花さえありや杯の雨が降りますよ」

「呆あきれた野郎だ、人の酒で花見をする気でいやがる」

「上野は筋の良い客がいるから、偶たまには小袖幕こそでまくから呼込まれるよ。うな都合にならないものでもあるまいと思ってやって来ると——」

「馬鹿野郎、序幕じよまくでお姫様に見染められる気でいやがる」

「それくらい押が強くないと、結構な花見は出来ませんよ、——ところで、その気で上野へ出かけると、山下で大変なものに出逢でっくわしたんで」

ガラツ八の八五郎は、何やら仕事を嗅ぎつけて来た様子です。

「お姫様が山下で虎になつて居たとでもいうのか」

平次はまだ茶かし気味です。

「殺しがあつたんですよ、——尤も斬つたのは浪人ながら歴れっきとした武家で、斬られた方は油虫のような安悪党だから、こいつは場所次第では、無礼討でも済んだ筈ですが、困つたことに車坂御門の側で、さいしよに駆け付けたのは御山おやま同心だ」

「それじゃ寺社のお係りだろう、お前が花見を諦めるほどの筋じゃあるめえ」

「それがいけねえ、車坂御門の側で血を流したに違げえねえが、死骸のあつた場所はやはり虎門の外だ」

「話がうるさいね」

「土地の御用聞や町役人につかまつて、とうとう半日丸潰まるつぶれ、——このままで帰つても恰好がつかねえから、いちおう親分の耳にも入れて」

「ちようど空きっ腹の恰好もつけようというんだらう」

「まア、そんな事で」

「お静、聞いたろうな、八に斎とぎを上げる支度だよ」

「ハイ、もう直き出来ませんが」

平次の恋女房のお静は、お勝手に爽さわやかに返事をしました。

「いったいその車坂御門外の刃傷沙汰にんじょうさたというのはどうした事なのだ。目刺めさしの焼けるうちに、ざっと筋を通して見な」

平次はようやくとぐろをほぐして、煙草盆を引寄せました

「斬つたのは山下の御浪人で、大寺源十郎という人、この人は柄が小さくて、顔も声も女の子のように優しいが、腕はよっほど出来るようですよ」

「その人なら、おれも顔くらいは知っているよ」

「ゆうべ御切手町の薬種屋長崎屋庄六の家にウンザのケエがあつて」

「なんだ、そのフン返り返つた——てえのは」

「ウンザのケエですよ、——何んとかや、哉かなつて、十七文字並べる奴、都々逸とといつの端折はしよつたの」

「俳諧はいかいだろう」

「そのケエですよ、集つたのは、山崎町の酒屋倉賀屋倉松と、車坂の呉服屋中田屋杉之助、それに浪人の大寺源十郎と主人の庄六を入れて四人、子刻ここのつ（十二時）過ぎまでパチパチやった」

「馬鹿だなア、花合せじゃあるめえし、へエケエをパチパチやる奴があるか」

「素人量見ですよ、どうせあつしはそんなチヨボクレは知らねえ、——ともかく子刻ここのつ過ぎまで嘔み合つて、——これもいけませんか」

「それからどうしたのだ」

「車坂へ帰る中田屋杉之助と、山下へ帰る大寺源十郎といつしよに長崎屋を出た所で、提灯ちようちんが一つ、長崎屋の紋の付いたのを持って、杉之助が先に立って来たが、途中で紙入を忘れた事を思い出して、中田屋杉之助がもういちど長崎屋へ引返した」

「——」

「その時、どうせ私の家は近いから、と提灯を大寺源十郎に持たせ、その上夜半から急に薄寒い小雨になつたので、——失礼だがまだ新しいから、これを——と、用心のために着ていた合羽かっぱを脱いで、辞退する大寺源十郎に着せ、中田屋杉之助は傘だけ差して長崎屋に戻り、幸い無事に座布団の下に入っていた紙入を取つて

貰って、そのまま家へ帰った」

「一方、中田屋杉之助の合羽を着て、長崎屋の印しるしの入った提灯を持った大寺源十郎は、少し風邪気味だったので、薄寒い襟元えりもとをかき合せながら、正宝寺門前まで来ると、いきなり闇の中から飛出して後ろからパツとヒ首あいくちで土手っ腹を突いて来た者がある」

「声も掛けずにか」

「え、卑怯ひきょうな野郎で、鉄砲玉のように飛出すと、油断をしている大寺源十郎の後ろから身体ごと叩き付けて来たんだそうです。――

大抵の者なら芋刺いもざしになるところだったが、御浪人は、腕が良いから、サツとかわした。と、前へのめるかと見た曲者は、これも恐ろしい腕利きで、クルリと立直って、今度は正面から猪突いのししきに、サツ、サツ、サツと突いて来たんだそうで――」

「フム」

「誰だッ、名乗れッ、と言ったが物も言わない、あんまり執拗しつとつこく来るので、持て余した大寺源十郎、合羽の下に隠すようにして持っていた一刀、引抜き様サツと浴びせると、相手も油断していたものか、大袈裟おおげさに斬られて死んでしまいました。――その騒ぎを聞付けて、飛んで来たのは御山同心と、近所の衆。提灯のあたりで見ると、斬られて居るのは、何んと下谷浅草一円まむしに蝮まむしのように嫌われている、山の宿の鉄というやくざ者。金にさえなれば、どんな事でもするという、箸にも棒にもかからぬ野郎じゃありませんか」

八五郎はようやく語りおわりました。

「それつきりか」

「いえ、これつきりじゃ唯ただの追剥おいはぎで、一席弁たずる程のこともありませんが、後で死骸を調べて見ると、鉄の野郎の懷中に、小判で十両という大金があつたんだから話の種でしょう」

「フム」

「小ばくちと女で身を持ち崩している鉄の懷中に十両と纏まとった大金があるわけはなし。——いや、それどころではなく、近ごろ不漁け続きで昨日の昼頃まで百も持っていなかったのは、仲間は皆んな知っているし、七にも八にも置く物はなし、鉄の野郎には一貫と纏まとまった物を貸す酔狂人すいきやうもないとなると、いったいこの十両は何処から出た金でしょう？」

「俺が知るものか」

「もう一つ変なことに、その十両の金を包んでいる紙というのは、ブンブン葉の匂いのする、長崎屋の印の入った葉袋だとしたら、どんなものでしょうね。親分」

八五郎は膝を進めました。

「誰かの細工だろうよ、だが、長崎屋でないことだけは確たしかさ、自分の店の名の入った葉袋へ金を入れて人にやるのは変じゃなにか」

「あつしもそう思ったから、三輪の万七親分が変なことを言うのを尻目に、ここまで飛んで来たわけです。どうしたものでしょう、親分」

八五郎は一気に弁じて最後の問いを投げ出しました。

「フーム、それは面白いな、俺の方にも、少しばかり思い当るところがあるんだが——」

銭形平次は唸うなりました。火の消えた煙管を脂下がりうなりに、滅多に見せない真剣な顔になるのです。

「へエー、どんな事に思い当たったんで」

「車坂の中田屋杉之助が、変なことを言っ来てたんだ——もう十日も前かな」

平次は指などを折りながら続けるのでした。

「その中田屋の主人杉之助が、いきなりやって来て、——私は悪者に付け狙われているから、何んとかして下さい——という頼みだ、三十そこそこのちよいと好い男だよ」

「あつしも逢いましたよ。御山同心が大寺源十郎をいちおう取調べていると、番屋へやって来て、——曲者が狙ったのは、この中田屋に違いありません、合羽をお貸しした上、提灯まで差上げて、飛んだ御迷惑をかけました、曲者は人違いをしたので、大寺様には何んの不都合もある筈はございません——と一生懸命弁じていましたよ」

「その男だ、色の浅黒い、苦味走にがみほしった、ちよいと好い男の——」

「そう言えば、少しばかり親分に似ていますがね」

「馬鹿なことを言え」

「ところで、その中田屋がどんな事を言うんで——」

「斯こう斯うとはっきり言えるような、形のあることではないが、近ごろ誰かに付け狙われて居るようで、不気味で仕様がな——」

と云うのだ」

「へエ」

「外へ出ると、夜も昼も誰かに跟けられるし、夜分は何んとも知れない者が、家の廻りにウロウロしている、毎朝戸を開けて見ると、怪しい足跡で、窓の外や庇の下が踏み荒されていると斯う言うんだ」

「妙な心持でしようね」

「その時はそれなりに聴き流しておいたが、山の宿の鉄などという命知らずの悪者をけしかけ、夜道で待ち伏せして中田屋を狙うのは質が悪いな、——俺はそんな細工をする奴は大嫌いなさ」

平次はこの得体の知れない事件に対して、妙に不気味さと義憤を感じた様子です。

「行つて見ましようか、親分」

八五郎は誘いにかかりました。

「よかろう、お前の言い草じゃないが、今日は家に引つ込んでいくような陽気じゃないようだ」

手早く仕度をした平次は、午後の街へ飛出しました。後ろからは長んがい顎を撫でながらガラツ八の八五郎がフラフラと跟いて行くのです。

「道順から言うと、山下の御浪人の家が先ですよ。それから車坂御門の現場で、三番目が、中田屋で——」

ガラツ八は案内顔になります。

「いや、中田屋が先だ、——火元はその辺らしいよ」  
「そんなもんですかねエ」

八五郎が先に立って、中田屋の暖簾を潜ると、

「入らっしゃい」

白雲頭の小僧が一人、それでも威勢よく声を掛けました。二間間口の淋しい店で、主人の杉之助が、小唄に凝こったり、俳諧はいかいを捻ひねったり、商売が身につかないのもうなずけます。

「主人は居るかい」

「へエ？」

よくやって来るさし、売りか押借おしがりとでも思ったか、小僧は急には取次とりつぎごうとしません。

「神田の平次と八五郎が来たと言ってくれ」

後ろから平次が声を掛けると、奥でそれを聞いたものか、主人の杉之助は、少しあわてた様子で飛出して来ました。

「これは親分様方、御苦勞様でございます。まア、どうぞ此方へ」  
二人を奥の一と間に案内します。そう言えば少し銭形平次に似ているかも知れません。三十前後のちよつと好い男で、ただの町人というよりは、世にいう通人とか芸人などに、一脈相通ひびするもののある、あく抜けのした人柄です。だが、それは——少し卑下ひげし過ぎるにしても、愛嬌のある取りなしでした。

奥の一と間——と言っても、店から居間を距へだてたばかりの六畳で、さすがに住みよげに、気取った調度を並べておりますが、何んとなくそれは間に合せもので、世帯の苦しさは品々の配置にも沁しみ出しております。

平次と八五郎の姿を見ると、ていねいに一礼して、お茶の仕度でもするらしく、ツト立った女がありました。

「妹のお鳥と申しますが」

振り返ってニッコリする顔は二十六七、大年増と言って宜い年

配ですが、淋しいところはあるにしても、兄の杉之助に似て、抜群ぐんのきりようです。

「昨夜は、飛んだことがあったそうだな」

平次はわだかま蟠りのない調子でした。

「へエ、全く驚きました。山の宿の鉄というのは気味の悪い男で、よく店へさし売りに来ました。銭が少ないといきなり怒鳴る癖があつて、幾度持て余したか知れません。その蝮まむしのような男が、私を狙つていようとは——」

杉之助はゴクリと固唾かたずを呑むのです。

「お前を狙つたに相違あるまいな」

「大寺様に合羽をお貸ししたのが悪うございました」

「それにしてはおかしの事があるが——」

「へエ？」

「お前を狙つた者が、この店を通り越して、ずっと先の車坂御門外まで跟けて行って、大寺という御浪人に斬つてかかったそうではないか」

「何んかの思い違いでございましょうな——合羽と提灯に釣られたのでございましょう」

杉之助は事もなげに言うのです。

「お前を狙つている者があるとは、この間も聴いたが、そんなに人様におほえ怨まれる覚があるのか」

平次は訊きました。

「いえ、それがどうしても思い当りません。呉服屋はしておりますが、こんな小さい店で商売敵という程のものはなし、附合いでずいぶん遊びもいたしますが、深間もなじみ馴染もございませぬ」

「お前は、その年でまだ配偶つれあいはないのか」

「ございましたが、去年の春亡くなって、それから、まだ後添は決りません。話は随分ございますが、長し短かして、へエ」

「妹というのは」

「これは一度縁付きましたが、話し合いで別れました。縁付いた先は山崎町の酒屋で、へエ、倉賀屋の倉松さんでございます」

「そうか」

自分の話になると、さすがに、気がさしたものか、妹のお鳥は、お茶を盆のまま兄の方に滑らせて、さっさとお勝手に姿を隠しました。物越しは、物の影のように静かですが、青白い顔にも、異常に赤い唇にも、妙に魅惑みわくてきなところのある女です。

「その妹の離縁になったわけは」

「そればかりは申上げられません」

杉之助の顔は苦渋くじゅうになります。

「それはまたどういうわけだ」

「妹の恥になることは、この兄の口からは申上げ兼ねます——」

「それはお前の揖ではないか、つまらぬ事でお上に疑いがかかるかも知れないが」

「疑いと仰しやると」

「お前は昨夜、誰かに狙われていると知ってわざと紙入を忘れたり、合羽や提灯を大寺氏に持たせたかも知れないではないか」

「飛んでもない親分」

中田屋杉之助はこの突っ込みにはひどく弱った様子です。

「兄さん」

そつと唐紙が開いて、杉之助の袖を引いたのは妹のお鳥でした。

「黙って居ろ、お前は」

「でも、見す見す兄さんがお困りになっているのを——」

「宜いよ、判っているよ」

その袖を振り払うのを、搔きわけるようにお鳥は顔を出しました。蒼白い顔は少し逆上のぼせて、隠された美しさは、激情あおに煽られたように人に迫るのです。

「親分さん、お聴き下さい、この私はろくろ首なんだそうです」  
「お鳥、お鳥」

兄杉之助の牽制けんせいも何んの甲斐もありません、激情あおに煽られたお鳥は、恥も外聞も振り捨てて、ついに言うべきことを言ってしまったのです。

平次と八五郎は、互に顔を見合わせるばかり、しばらくは言葉もありません。

### 三

平次は、この陰惨いんさんな空気の中から逃出すと、八五郎を先に立て、御切手町の長崎屋に向いました。

「おどろいたね、親分。あの綺麗な首が抜け出して、行燈の油でも嘗なめる図と来ちゃ——」

ガラツ八は首を縮めて、ペロリと舌を出すのです。  
「洒落しやれた芸当じゃないか、どうだい、お前の女房に世話をしようか」

「御免蒙しょうむりやしよう。夜中にフラフラ浮出した首が、屏風びょうぶの上なんかに載かっていた日にゃ、睦言むつごとの見当が付かねえ」

「馬鹿だなア——だが、倉賀屋も殺生な悪名をつけたものだなア」  
平次は妙に感に堪たえております。

無駄を言いながらも二人は御切手町の生薬屋——長崎屋の店は遠慮して、裏口から入っております。

「これは、親分さん方」

早くも八五郎を見付けたのは、先刻まで係り合いで引出されていた主人の庄六でした。二十七八の少し野暮ったいところはありますが、柄の大きい、眉の秀ひでた、知的な感じの男です。

「昨夜は飛んだ事だったね」

平次は如才ないと思うほど平明な態度で切出しました。

「全く驚きました。でも、考えようでは中田屋さんは提灯を貸して、引返したから助かったようなものでございます。大寺さんから鉄の野郎をあべこべに負かしたんで」

「そんなものかも知れない、——ところで運座うんざはどんな具合だったえ、——俺は俳諧ども都々逸どいつも知らないが」

「大した名句も出ませんが、それでも幸いに私のできがよくて、飛んだ花を持たせて頂きました」

「中田屋の忘れて行った紙入というのは、何が入って居たんだ」  
「座布団の下にあったので、中田屋さんの物とすぐ気が付きました、中は調べもいたしません」

「ところで、妙なことを訊くようだが、近頃中田屋と倉賀屋の仲はどうだ」

「サア」

長崎屋はちよつと答えに渋しぶりました。

「世間の噂では、あの妹のお鳥というのが不縁になってから、あ

「まりよくないと言うことだが」

「何と申しましても、あんな事のあった後ですから——でも先代からのお付合ですから、今さら顔を反そむけても通れず、私どももまた、出来るだけ折を見て、お二人の仲を元々のようにして上げたいと骨を折っております」

長崎屋庄六は、これだけの事を言うのも精いっぱいでした。

平次はそこを宜い加減に切上げて、山崎町の倉賀屋へ廻るつもりでしたが、裏口を出るとどこへ潜っていたか、八五郎が飛んで来て、

「店を覗いて下さいな、親分、たいへんな代物しろものがいるから」  
平次の袂たもとを引くのです。

「何んだ、ウワバミの黒焼でもあるのか」

「まア、騙だまされたと思つて一と眼」

八五郎に尻を押されるように、平次はどうとう暖簾のれんを搔きわけました。

「入らっしゃい」

小僧が二人、プーンと匂う店の空気の中に、雛壇ひなだんから借りて来たように並んでおりますが、突当りの百味ひゃくみだんすの前、帳場格子の中には、十八九の娘が一人、筆の穂先ほさきを嚙んだまま、何やら思案をしているではありませんか。

「——」

二人の顔を見ると、驚いたように筆を置いて、黙つてお辞儀をしました。丸ぼちやの健康そうな、眼の大きい娘、そして愛嬌のある赤い唇には、ポツチリ墨が付いて、それがまたとなく可愛らしく見えるのです。



©2017 萩 袖月

暖簾<sup>のれん</sup>を潜<sup>ひそ</sup>って飛込んだものの、平次も八五郎もここでは何を訊く当てもありません。

商売はどうだ、——風雅の薬には何が良い——花見の相談はないか——と言った纏<sup>まと</sup>りのつかない事を訊いて、平次に促<sup>うなが</sup>されるように外へ出ました。

「良い娘でしょう、親分。多与<sup>たより</sup>里<sup>り</sup>と言って十九の厄<sup>やく</sup>だ。兄の庄六も良い男だが」

「あの娘を見せて何うしようと言うのだ」

「眼の保養ですよ、親分、十手捕繩の役得」

「馬鹿だなア」

「でもろくろ首のお鳥の方が美人というんでしようね。あれは凄<sup>すご</sup>いが、これは可愛い方で、あつしは誰が何んと言っても此方<sup>こっち</sup>へ札を入れますよ」

「止せよ、馬鹿馬鹿しい。堅気の娘が、岡っ引の女房になるかならないか、口惜くやしかったら当って見ろ」

「ところが、あの娘はもう約束済みなんで」

「何処だ、約束した先は？」

「中田屋ですよ。仲人なこうどが入って、結納まで取交したということですが、十九の厄だから今年はいけなとかで、延々のびのびになっているんで——尤も、あのろくろ姫の噂で、長崎屋の方で嫌気がさしているとも言いますがね」

「それは気の毒だな」

「そこへ倉賀屋が割り込んで、こいつは金づくで、ろくろ姫の後釜たよりに、あの多与里たよりという娘を狙っているとも言いますよ。倉賀屋は下谷で何番という大金持で、中田屋へも長崎屋へも、かなりの金を廻しているということですから、自然押しもきくでしょう」

「フーム」

「ことに長崎屋は、身上の半分は倉賀屋のもので、倉賀屋が一つかぶりを振ると、あの薬屋の屋台はガタガタくずに崩れる」

「——」

「ところで、もう一つ悪いことに、長崎屋のあの多与里という娘が、中田屋の主人に満更じゃないと来ているんで、へっ、厄介な話ですね」

八五郎はまた首を縮ちぢめて舌を出すのです。

そこから山崎町の倉賀屋へ廻って見ましたが、これは言わば事件じけんの埒外らちがいにいるようなもので、大した話ありません。主人の倉松は三十五六の大家の主人らしい寛厚な感じのする働き者、店構への立派さ、住居の行届いた調度など、さすが下谷で何番と言わ

れる伊達者だけのことはあります。

「昨夜は飛んだ事があったそうで、驚いておりますよ。中田屋さんに怨のある者？——そんな事は考えられません。中田屋さんはあの通り如才のない人で」

倉松は何を訊いても巧みに外らすだけです。

念のため先妻のお鳥を離別したわけを突っ込むと、

「それだけは御勘弁を願います。たつてと仰しゃれば、家風に合わなかったからと申す外はございません」

と尤も至極の挨拶です。

そこを宜い加減に切上げて、山下に向う途中、ガラッ八は相変らずの早耳で搜ったことを平次に報告するのでした。

「——倉賀屋の主人は、中田屋を怨む者の心当りはないなんてウマイ事を言いますがね、あの店の小僧にそつと訊くと、近ごろ中田屋から大変な掛け合いが来ているそうですよ。何んでも妹に難癖をつけて追出した償いに、今までの借に棒を引いた上、何百両とかの手切れを出せというんだそうで——」

「それを出し惜んで、山の宿の鉄などを頼みそうな男でもないが——」

平次は倉賀屋倉松の人柄に惚れ込んだ様子です。

山下の浪人大寺源十郎は留守、これはしかし逢ったところで、大した手掛りもなかったでしょう。

「この先また何んか変な事がなきや宜いが——」

平次はこの事件の底を流れる無気味な暗流に気付いたらしく、そんな事を言いながら割り切れない心持で引揚げるのでした。

## 四

それから三日目、予ての約束があつたので、今さら変替もならず、倉賀屋、長崎屋、中田屋の主人に浪人の大寺源十郎が加わり、女二人——お鳥と多与里——に小僧三人、それだけの人数で、向島に花見船を出しました。

この間の運座の会は長崎屋の催し、こんどの花見は倉賀屋の受持で、騒々しいからと幫間末社は呼ばず。

お酌は美しい女が二人、お爛番は中田屋杉之助自分で承わり、小僧三人に雑用をさせて、昼少し過ぎに大川橋から漕ぎ上った船が、向島の土手の賑いを右手に眺めて歌いながら、踊りながら、そして飲みながら、水神のしずかな場所を選んで岸に寄せたのは、もう夕景近くなってからでした。

これから夜桜を左手に眺めて大川を下り、宵のうちには下谷の店へ引揚げようという寸法、折から詠えたように桜の梢に夕月が昇って、酔も興も、まさに絶頂でした。

「さあ、いよいよ下りだ、ここで予て用意の良いのを開けよう」  
倉賀屋は特に取寄せたという灘の生一本、それを三本の徳利に入れて、お爛番の杉之助が念入りに爛をつけました。

こんな席になると、一番貧乏でも、多芸で愛嬌があつて、酒の強い中田屋が人気者でした。隠し芸がまた一とわたり。

「さア、皆さん、盃を乾したり乾したり、今度こそは倉賀屋さんが特別に取寄せたという灘の生一本、黄金の煎じ汁のような酒だ、一杯飲むと十年くらいずっとは生き延びようという代物、——まず施主の倉賀屋さんから」

中田屋が立って自分で酌をしました。

「と、と、と、散ります散ります」

「次は大寺さん、それから長崎屋さんと言いたいが、困ったことに長崎屋さんは下戸げこで、一滴もいけずか」

「ありがたい、頂戴いたす」

倉賀屋倉松と大寺源十郎の兩人、二三杯ずつ立てつづけに呑みほすと、

「中田屋さん、お前さんも酌ばかりしていずに、付き合っちゃどうです」

倉賀屋の倉松は空っぽになった杯を置いて中田屋を促うながします。

「え、頂戴しますよ、——あッ、徳利を川へ落してしまった。仕様ががないなア、どれ二本目のを」

小僧が差出した二本目の徳利、それから大きいのへ十分に注いで。見事に呑み乾した中田屋杉之助、

「——ひどく辛いような気がしますが、——倉賀屋さんの前だけだれど」

しばらく首を傾かしげております。

「そんな筈はないが、——どれ」

手を延ばしてその徳利を取上げた倉賀屋の肘ひじへ、そつと触った者があります。

「——」

見ると、それは多与里の手でした。そつと指した方を見ると、

「あッ」

中田屋杉之助の顔は真っ蒼、——その藍あいのような額に油汗が浮かんで、恐ろしい苦惱の色が鞭打むちうったように顔中を走ると、胸を

押えてカッと吐いたのは一塊ひとかたまりの血潮です。

船の中は引っくり返るような騒ぎですが、薄暗くなりかけた水神では、急場の医者も間に合いません。

中田屋杉之助は、斯こうしてろくな手当も受けず、美しい妹お鳥の膝に抱かれて、もだえ死に死んでしまいました。

騒ぎを聴いて土地の御用聞が駆け付けた時は、何も彼も後の祭り。満開の桜しずえの梢しずえに、芝居の書割のような月が白々と掛って、遠い花見の賑いが、浅ましく淋しく、そして疎うとましく響いて来るのでした。

## 五

「親分、とうとう大変なことになりましたよ」

ガラツ八の八五郎が、親分の平次に、この事件を報告して来たのは、翌る日の朝でした。

「倉賀屋の花見船の騒ぎなら、先刻下つ引が飛んで来て教えてくれたよ」

「じゃ出かけましょう」

「何処へ行くんだ。向島へ行つたところで船は空っぽだぜ」

平次は動こうとしません。

「やはり中田屋が狙われていたんですね。下手人は何奴でしょう」

「それを今考えているんだ」

「徳利に残った酒をあとで調べると、南蛮なんばん仕込みの恐ろしい毒が入っていたそうですよ。その毒薬は江戸中の生薬屋にも滅多にないが、長崎屋庄六は少し持っているんだそうで、今朝三輪の万七

親分に縛られて行きましたよ」

「それは可哀想だ、——で、庄六は何んと弁解をしているか、聞いたか」

「毒薬は私の店にあった品だが、誰が盗み出したか、そこまでは解らない、と言うんだそうもつとで。尤もお許しのない毒薬を持っているのは、薬種屋でも禁制だが、長崎屋のは鼠捕りに使うために仕入れたので、それで鼠捕り団子を拵えて、船に売込むんだということですよ」

「なるほどな——そんな事もあるだろう」

「下手人はやはり長崎屋でしょうか、親分」

「イヤ、違う、長崎屋なら、江戸中で自分のところにしかないと思われ渡っている毒薬は使わない筈だ」

「じゃ？」

「待ってくれ、急いでも駄目だ、お前に頼みたいことがあるんだが——それはきのう船の中にいた人間を一人一人訪ねて、中田屋が毒酒を呑んだ時の人間の坐っていた場所と、徳利を置いてあつた場所、酒樽の場所などを出来るだけ細かに書いて貰いたいんだ——言うまでもないことだが、一人に一枚ずつ書かせるんだぜ、他人の書いたのを見せると、却かえって迷わせるから、お互に書いたのを見せないことだよ」

「へエ」

「それさえありゃ、俺はここに坐っていても下手人を言い当てるよ」

「へエ」

八五郎は腑ふに落ちないような顔をしましたが、それでも文句も

言わずに飛出しました。

それから半日、

「さア、これで宜いでしょう、——絵図面は九枚できましたよ。男四人、女二人、小僧三人、それに船頭二人で総勢十一人のうち、一人は死んで、一人は縛られたから、これで皆んなで」

並べた船中見取図は九枚、いずれも半紙一枚ずつに書いたものですが、見比べて行くと人間の記憶は似たり寄ったりで、人の位置も徳利の場所も、皆んな覚えてるのは一人もありませんが、それでも自分のいた場所の両隣と正面くらいは知っているので、九枚併せると何うやらその時の船中の詳しい見取図はでき上がります。

「真ん中に男が三人並んでいて、女二人はその両側か。お鳥は大寺源十郎の側で、その次が倉松だ。多与里は兄の庄六と死んだ中田屋の間にいる——中田屋の次は小僧が二人、船頭、その中に七輪を据えてあったわけだな」

「——」

「徳利は皆んなで十本、樽たるが二つ、あとはお重詰だ。七本の徳利は無地で並酒が入っていた——上酒の入っている三本の徳利は模様入りで——一本はまだ酒が入ったまま七輪の側にあったし、これには毒が入っていないなかったのだな。一本は杉之助の側にあった、あれは毒の入っている呑みかけの徳利。あとの一本は？ 何？——杉之助が船縁ふなべりから川へ落した？ それは倉賀屋と浪人の大寺という人が呑んで、いくらも残ってはいなかったというのか」

「——」

「八、もう一つ頼みがある」

「へエ、何んでもやりますよ、腹さえ拵こさえれば」

「よく減る腹だ、——お静、八に飯の仕度をしてやってくれ」

「仕事は何んです、親分」

八五郎は照れ隠しらしく聞き返しました。

「船はそのとき水神の岸にもや、つ、つ、あつたと言つたな」

「へエ」

「あの辺なら底は浅いし、水も綺麗だ、その中田屋杉之助の落した徳利を探して来てくれ」

「やって見ましよう」

## 六

八五郎が、同じ模様の徳利を、水神の船着場の水の中から捜し出して来たのは、翌々日の朝でした。

「潮の引くのを待って、拾って来ましたよ、この徳利に間違いありませんが、中には酒の気も残ってはいませんよ」

八五郎の持つて来た徳利というのは、藍あいえ絵の竹を描いた瀬戸の良い徳利で。

「これだよ——これが見たかつたのだ」

平次が期待したのは、水の中に沈んだ徳利の酒の臭いではなくて、その首を縛った、細い細い白木綿糸だったのです。

「それはどんな禁呪まじないです、親分」

「ほかの二本の徳利と見分けるためだよ」

「でも、その木綿糸で縛った徳利にも、もう一本の七輪の傍に置いてあった目印のない徳利にも毒はなかつたんですぜ」

「その通りだ、そこが面白いところだよ、——俺はちよいと長崎屋へ行って来る、お前も行って見ないか」

「行きましよう、——あの娘が泣いていますよ」

平次とガラツ八は、真つすぐに長崎屋へ行くと、奥の一と間に妹の多与里たよりを呼びました。

兄の庄六が三輪の万七に縛られて行ってからは、店の仕事も手につかず、多与里はただ泣いてばかりいる様子です。

「兄を助けたかったら——」

「——」

平次はその泣きじゃくる多与里と膝を突き合せるように言い  
ました。

「お前のした事を正直に話してくれ」

「？」

「徳利の目印のことだ、お前は何にか知っているに違いない」

「え、皆んな申上げます、——中田屋さんが、おどけた事を言いながら、袂たもとから木綿糸を出して一本の徳利の口を縛しばるんです。——

あの人は、油断のならない人だと、私はいつでも思っておりまして、ですから——」

「？」

「私は、その徳利の木綿糸を解いて、外の徳利の首へ付けたんです。ただ、それだけの事でした。あんな事になろうとは、夢にも  
思いません」

多与里は自分のした事の恐ろしさに脅おびえて泣くのです。

×

×

この物語はこれで終ります。

まもなく長崎庄六は、銭形平次の計らいで許され、この事件にはとうとう下手人は揚がらなかったのです。

「さア解らねエ、山の宿の鉄をけしかけたり、徳利に毒を入れて、中田屋を殺したのは、いったい誰です、親分」

ガラッ八の八五郎がキナ臭い鼻を持って来たのも無理のないことでした。

「中田屋だよ」

「へエ？ 中田屋を殺した奴ですよ」

「だから中田屋杉之助が中田屋杉之助を殺したのだよ」

「へエ？」

「さいしょ山の宿の鉄が、大寺という浪人に殺された時から俺は変だと思ったよ、——その時もそう言った筈だ。合羽かっぱと提灯ちようちんを借りたにしても、大寺源十郎が鉄に襲われたのは、車坂の中田屋の前をズツと通り過ぎてからだよ。中田屋と間違えて鉄が斬りかけたのでないことは確かだ——そうかと言って、山の宿の鉄は腕の良いい武家を狙う筈もなからう」

「？」

「それに、中田屋は長崎屋に紙入を忘れているが、紙入は座布団の下に入れてあったというじゃないか。誰がいったい大事な紙入を他所の家の座布団の下などに入れて置くと思う——座布団の上に置くとすぐ見付けられて家を出ないうちに呼留められるから、大寺源十郎に合羽も提灯も貸せないことになる——」

「何んだって中田屋は、鉄を大寺なんて人に噛みつかせたんでしよう」

「自分が誰かに狙われてると思わせて置いて、次の大仕事をする

ためだよ。その時はもう、中田屋は毒を手に入れていたかも知れない。長崎屋へ始終出入りして居たというから、あの百味たんすの赤い印の付いたのを抜いて、予て聞いた恐ろしい毒を少しばかり盗むのは何んでもないことだ」

「へエ」

「そして大寺源十郎にカスリ傷くらい負わせるつもりだったろうが、大寺という人は、弱そうに見えて思いのほかの腕達者で、鉄の野郎があべこべにやられた。中田屋も大寺源十郎の腕前は知らなかった」

「――」

「だが、狙われているのは自分と思わせるには十分さ。次は花見船の毒だ、倉賀屋と大寺源十郎くらいを殺し、自分も少しは毒に中つたような顔をするつもりだったと思うよ。長崎屋は下戸で酒は一滴も呑まないから、これは下手人にする」

「――」

「毒を入れた徳利には木綿糸で印をつけて置いた。そんな事はお爛番の杉之助の自由自在だ。が、その目印の糸を、多与里に付け替えられたとは知らなかった。倉賀屋や大寺源十郎に呑ませたのを毒酒と思い込んでいるから、間違った振りをしてその徳利を川へ落した。そして自分は二本目の徳利の酒を毒酒と知らずに呑んだ。これで中田屋殺しの下手人は、中田屋杉之助というわけがわかったろう」

「へエ、恐ろしい野郎ですね、何んだってそんな事をしたんでしよう」

「倉賀屋に不義理の借金が嵩んだのと、妹が不縁になったのを怨

んでいた上、こんどは自分が長いあいだ心に掛けていた長崎屋の妹の多与里が、いよいよ倉賀屋へ嫁に行くことになりそうなので、あんな大外れた事を企らんだのだろう。それから中田屋の妹のお鳥だ」

「――」

「あの女がろくろ首だというのは嘘だろうと思う、そんな化物はある筈もないし、本当なら、いくら何でも本人のお鳥が進んで言う筈はない。あれは、ろくろ首よりもっと外聞の悪いことで、倉賀屋から追出されたことと思うよ。――さア、それは何んだか、俺にはわからないが」

平次はそう言つて首を捻ひねるのです。

(編注)

底本では「提灯」を「提燈」と表記してはいますが、本全集の他の作品の表記に準じて「提灯」に改めました。

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和二十一年四月号 文藝春秋新社

底本―「錢形平次捕物全集」第八巻 河出書房 昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行 錢形倶楽部